

1 研究テーマ

情報産業界のニーズに即した人材育成について

2 はじめに

今、注目されている授業に「学び合い」がある。「学び合い」というと、集団活動や共同作業という形態にとらわれがちである。どんな指導法もそうであるが、「ただ何となく集団活動させたら雰囲気は良くなった」だけでは、真の「学び合い」となっていない。「学び合い」を理解し、論理的に授業を組み立て、効果的な声掛けを行うことで、期待する結果を得られる。私は、この度の研究で、「学び合い」は産業構造の変化に対応した学びではないかと考え、専門高校での実践形態を提案する。

3 研究目的

バブル経済が破綻し、大量生産時代が終わった。高度成長時代には、大量生産を前提としたオートメーション工程の中で仕事を分担され、効率良くこなすことを求められてきたが、現在は、価値あるものの創造が必要となっている。このため、産業界は「個人の行動力と集団における協調性」のある者を求めるようになった。産業界の変化に対し、高校教育はどうだろうか？特に、産業界と密接な繋がりを持つ専門高校は、時代と共に変化を求められるはずである。そこで、この度の研究で産業界のニーズを調査し、専門教科情報の方向性を探ってみることにした。

4 研究内容

(1) 学習観の見直しの必要性

産業界が求める人材像

企業を訪問し調査したところ、産業界が求める人材像は次のようであった。

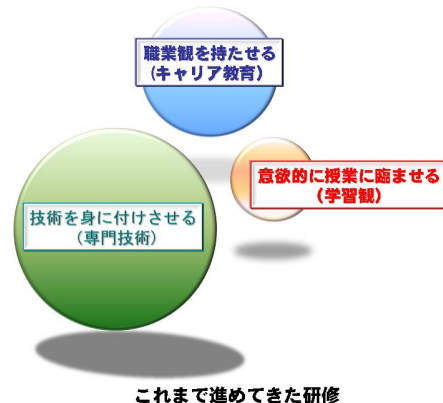
- ・ 夢を持ち、積極的に仕事にあたらうとする人
- ・ コミュニケーションをとり、協調性のある人
- ・ 課題意識を持ち、課題解決能力のある人

このことは、学校祭のような特別活動などで養われると考えてきた。しかし、充分ではなく、授業においても考慮する必要があると考えた。



根本的な見直し

これまで、授業は専門技術を教え込むものと考えていた。研修は、進路目標を持たせるための会社・学校訪問や高度な専門技術を教えるための専門研修を行ってきた。授業の進め方はあまり研究せず、分からないのは生徒側に要因があると思っていた。しかし、教員が高度な知識を持っていても、生徒が理解しなければ何もならず、まず、学習観を根本的に見直す必要があると感じた。



(2) 専門高校における新しい学びの研究

第1段階 教え込む授業から興味を持てる授業へ

今まで一斉授業しかしてこなかったのが、教授型授業をやめ興味を持てる授業展開を考えた。

- ・ 社会および情報産業を見通せる展開
- ・ 生徒中心の授業として問題解決型で展開
- ・ 産業界の要望から行動力、協調性を育成する展開

第1段階で分かったこと

産業界の要望から行動力・協調性育成のため共同作業を多く入れた。このため、生徒は意欲的になり、さらに多くの友人とコミュニケーションをとった生徒作品の方が良くなったと感じた。企業でもチームワークを重視しており、学び合う形態の授業に、更なる向上のヒントがあると考えた。

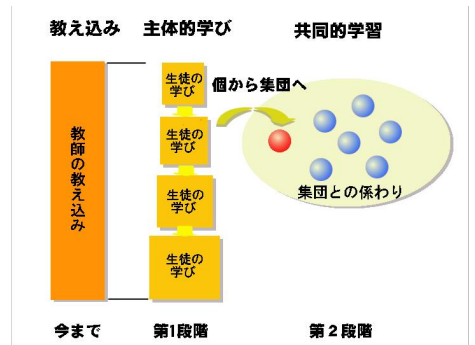
第2段階 学び合う形態の授業

「学び合い」を参考に、学び合う形態授業から創造性の向上について探ってみた。

- ・ 第1段階の問題解決型学習などの継続

- ・ 学び合う形態の授業と生徒の意欲の関係を調査
 - ・ 学び合う形態の授業と創造性向上の関係を調査
- 第2段階で分かったこと

学び合う形態の授業は効果があったが、生徒が、まず前を向く対策やさらに落ち着かせるため1対1よりグループを形成したほうが良いことが分かった。また、うまく授業へ引き込んでいくと急にスイッチが入ったように「もっと工夫して作りたい」と熱中してくることも分かった。



(3) 学習形態モデルの提案

「学び合い」は、状況論的学習観が元になっている。この学習観は、共同学習によって知識が身につくというより、1人の生徒が集団の中で自分を見つめ、これから何をしたら良いのかを考えるようになるというアイデンティティの形成を目的としている。集団活動の中で、自分の存在を見つめ直し、他人も認める。集団は、仲の良い友人で形成されるため、良いところを吸収しようという意欲が生じる。この意欲が、学びの原動力となる。

第2段階の結果を元に、次のような学習形態モデルを考えた。

意欲を喚起

「わからないことがあったら、自由に移動して、友人に聞いても良い」ということにする。このことで、個別学習では意欲減退気味な生徒も、仲の良い友人と会話をするため、意見交換に参加する。

意欲の継続

さらに、関わり合う範囲を広げさせるため、グループになりやすい促しをする。友人同士でグループになると安心して思考できるため、熱心に制作を継続できる。

意欲の深化

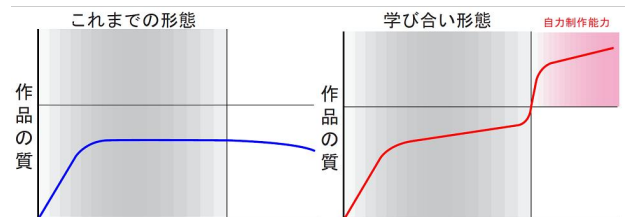
作品を展示してクラスすべての友人に評価をもらうなどの課題を作る。グループごとに知識や技術に差がでてしまうので、グループ外へ提示するなどして、さらに向学心を促す。

自力制作能力

これを繰り返すと、受身で臨んでいた生徒も「もっと、工夫してみたい」と意欲的になる。友達と相談しながら、自力でも制作できる人材の育成こそ、企業が求める人材ではないかと思う。

表 段階を越えた学び合う形態学習

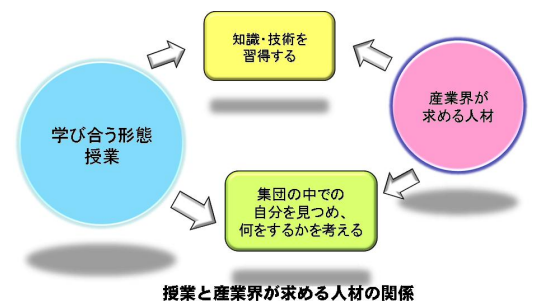
個別学習	学び合いの促し	グループ化の促し	グループを越える促し
今まで	自由に聞きあえる	安心して思考できる	向学心
意欲の減退	意欲を喚起	意欲の継続	意欲の深化



学習経過イメージの比較

5 研究のまとめ

このモデルを元に検証授業を行った結果、学び合う学習形態は、2つの大きな効果があったと考えられる。1つは、より高い知識・技術を習得させることができたこと、もう1つは、集団活動をさせたことで集団の中での自分の存在意義を見つめさせ、これから何をするのかを考えさせることができたのではないかとすることである。このような授業を行うことで、産業界の求める行動力や協調性のある人材育成に近づけることができると考える。



授業と産業界が求める人材の関係

6 今後の課題

単元後のアンケートから個別制作の方を好む生徒がいることが分かった。この生徒たちは、個人で行った方が効率が良いと考えているようだ。しかし、産業界はチームワークを求めており、これらに対応した展開を考える必要がある。

7 おわりに

作品の完成が間近になると、「時間が足りない」という生徒が出てきた。これは、「もっと工夫してみたい」という気持ちが出てきたためである。制作した作品は、私が予想していなかったような高い伸びを示した。さらに、研究を続け、このような気持ちを持つ生徒を増やしていきたい。